

百五里（1）

マラソンを通じての民間交流 深田晃二

民謡アリランに出てくる十里は日本の一里(約4 km)で、三千里は朝鮮半島の大きさを表す事はご存じの通りです。現在の韓国でフルマラソンの代名詞として使用されている百五里(105軒)をタイトルとして2回に亘り韓国マラソンやクラブとの交流について記してみたい。

1936年ベルリンマラソン

朝鮮半島のマラソンといえば1936年のベルリンマラソンで優勝した孫基禎氏の一生を抜きには語れない。ベルリンオリンピックでは三段跳びの田島、女子水泳の前畠、棒高跳びの西田・大江の銀銅半分分けした友情のメダルなど有名であり、マラソンでは同じ朝鮮出身の日本人選手南昇龍氏が3位に入っている。ヒットラーードイツの宣伝大会であった。当時日帝の支配下の為、氏は「心ならずも日の丸を付けて走り、いいしれぬ屈辱」を味わったと述懐し、「あの時、私の心は日本の為でなく韓国の為に走った」とも心情を明かしている。ゴールイン後の写真でも敗者の様な沈鬱な表情が印象的である。表彰式の写真の日の丸を塗りつぶして掲載した東亜日報が朝鮮総督府から10ヶ月の発刊停止処分を受けた「日章旗抹殺事件」は、氏への冷遇・規制・監視の強化へと繋がっていった。

沈薫の詩

氏が優勝した直後、詩人の沈薫は当時の感激を、激情のままに詩にしている。

「おお朝鮮男児よ！ ----- 沈薫
오오, 조선의 남아여! — 심훈
…ベルリンマラソンで優勝した孫、両君に
彼らの勝利を知らせる号外の裏に筆を走らすこの手は
形容し難い感激に震える！」

異国の空の下で彼らの心臓の中で煮えたぎる血が
2千3百万の一人である私の血管の中を流れるからだ
“勝った”の声を聞く事がない我らの鼓膜は
更けゆく夜、戦勝の鈴の音に
爆発するごとく、破裂くごとく
沈鬱な暗闇の中に打ち碎かれた故郷の空も
オリンピック炬火を灯した様に明るくしてくれる！
今宵彼らは、夢の中に祖国の戦勝を伝えようと
マラソンの険しい道を走り絶命した
アテネの兵士に会うであろう
それよりももっと勇敢だった先祖の精霊が加護する
2人の勇士が互いに抱き合い
感激にむせび泣くであろう
おお、我は叫びたい！

マイクを握りしめ全世界の人類に向かって叫びたい！
“まだこれでも君たちは我々を弱い民族だと呼ぶのか！”
(1936.8.10)」

沈薫はこの詩を書いた約1月後の9月16日に他界している。

天安独立記念館のカブト

天安にある独立記念館の第5展示館に一つのカブトがある。1875年にオリンピア遺跡から発掘されたBC6世紀古代ギリシャの馬上武者が使ったカブトである。氏の優勝の副賞としてギリシャが提供したものであるが、氏には渡らず、ドイツの博物館を転々としていた。反日運動の道具にされかねないと言うドイツの配慮

があったと言われ、韓国側の返還要求が実り1987年に氏へ返却されたとのことである。

ユニークな形に人気があるのか、ソウルでこのカブトのワッペンが車に貼ってあるのを見たことがある。

88年ソウルオリンピック

氏は後輩ランナーの指導育成に情熱的に取り組み、47年第51回ボストンマラソンで徐潤福が優勝、50年第54回ボストン優勝・咸基鎔、2位・宋吉允、3位崔崑七と表彰台を独占、半島を往復し焦土化した朝鮮戦争があったが、後年92年バルセロナ五輪で黄永祚が優勝と後進を育成してきた。

51年第55回ボストンマラソン優勝者である田中茂樹に「アジアの優勝を喜ぶ」旨の祝電を日本語で打ったりして、ランナーをこよなく愛している。

88年ソウルオリンピックの開会式では聖火をかかげて軽やかにトラックを半周し若人に聖火を託した。その聖火はまさに沈薫の詩のように韓国中を明るく照らしたことであろう。

92年モンジュイックの丘

孫基禎氏の優勝から56年目の1992年、バルセロナ五輪で韓国の黄永祚選手と日本の森下広一選手がモンジュイックの丘で激烈なデッドヒートを演じ、黄永祚選手が競り勝つ優勝した。韓国各マスコミは「56年間の



恨を晴らした」と書いた。その時、氏の80才を祝う会が東京で開かれ、後輩の黄選手の優勝と二重の喜びに包まれる中、カブトを披露しながら氏は日本の友人に「生きていて良かった」、「今日の優勝は7000万同胞の勝利」と目を潤ませていたという。

往復書簡

「韓国과 일본이 이룩한 이번 快挙가『21세기의 躍進 亞細亞』를 象徴하는 光景이었다는 知事님의 말씀에、本人 또한 全的으로 共感하고 있습니다。 다시 한번 뜻밖의 祝電을 보내주신 知事님께 感謝드리며、鳥取県의 發展과 知事님의 健勝을 祈願합니다。」

1992年8月13日 大韓民国 江原道知事 韓龍

「韓国と日本が成し遂げたこの度の快挙が『21世紀の躍進アジア』を象徴する光景だったという知事のお言葉に全く同感です。重ねて、予想もしなかった祝電を送って下さった知事に感謝すると共に、鳥取県の発展と知事の健勝を祈願致します。」

この手紙は黄選手の優勝に対し、森下選手の出身地である鳥取県知事から黄永祚選手の出身地の江原道知事へ宛てた「黄選手の優勝されたことを心からお喜び申し上げます」という手紙に対する返事で、当時の朝日新聞に写真入りで載ったものである。

2002年11月15日

孫基禎氏は、02年釜山アジア大会で李鳳柱とハム・ポンシルが南北で優勝を決めた時やサッカーワールドカップで韓国が4強に進出した時も本当に喜んだそうだが、2002年11月15日享年90才で他界された。氏にマラソンの指導を受けた徐潤福、咸基鎔、黄永祚、李鳳柱らが弔問に訪れ冥福を祈ったそうである。

マラソン交流の概要

孫基禎氏を通して韓国朝鮮のマラソンを概観したのは、韓国とマラソン交流するに当たり、その歴史を知つておく必要があると思うからである。

糖尿病対策としてジョギングを始めた翌年、阪神淡路大震災で仮住まいした尼崎で走ろう会(ARC)に入会した。ARCのホームページの掲示板に韓国から一通のメールが舞い込んできたのは昨年(2003年)2月初めであった。

「韓国高陽市一山所在 “一山湖水 marathon club” no 鄭成玉 des. 貴會 e-mail?」

このメールをきっかけにして11月8日から10日の3日間、韓国から12名の選手を迎えて西宮国際ハーフマラソンを同走、晚餐交流会で和気あいあいの交流、6組に分かれての一晩のホームステイ、大阪城や清水寺觀光などマラソンを通じての民間交流ができた。

また、来る4月17日から19日まで今度は先方のクラブが主管するマラソン大会に10名で参加することが決定している。これらの行事を通じて日韓市民の意識の相違点と共通点を見つけていきたい。

一山湖水(イルサンホス)マラソンクラブ

一山はソウルの北西、漢江沿いにある高陽市に1990年に出来た新しいニュータウンです。大阪での千里や堺市や泉州のような都市で、人口40万人という高層住宅街である。市内にはロッテ百貨店等があり、10km以内に統一展望台・臨津閣・W杯蹴球場などがある。仁川空港は約30kmの所にある。市内に人工湖がありクラブ名・一山湖水はそれに由来している。クラブ(略称:イルマ)は1998年に創設され、会員は1500人になろうとしている韓国最大級のクラブである。そのクラブ内のシニアの会“青脈会”から交流のメールが届いたわけである。関西方面のマラソンクラブとの交流をしたいとインターネットで探していく、33年の歴史のあるARCに声をかけたということである。

メール交換

団長の鄭成玉さんは神戸で生まれ6年間日本で育ち後に大阪総領事館の領事として5年間勤務された知日家・親日家である。流暢な日本語を使われる。が、e-mailではそうはいきません。最初の頃は本文にアルファベットで日本語や韓国語・英語を書いていたが、こちらがアーハンクル・ソフト(韓国で有名なワープロソフト)を購入し、添付ファイルでハングル・漢字が自由に使える様になり意思疎通がスムーズに行きだした。勿論FAX・電話も重要な手段として活用した。

大会参加費の送金から申し込み、観光・ホテル・ホームステイの段取りまで、呼び出し音が鳴らないので相手の都合を気にすることなくメールで情報交換出来る便利な世の中になったものだ。互いにホームページを見て情報を入手しているが、アクセス数から見てもクラブ運営でのIT使用状況から見ても、韓国のITは非常に進んでいると感じる。

またITに頼るだけでなく、たまに韓国訪問した時(むくげ201号で報告した視覚障害者サッカーのアジア大会関連で)には直接お会いし、また自宅まで訪問したり、意見の齟齬もなく順調に準備は進んだ。

2003年11月8~10日

団体交流とは言っても財政基盤は脆弱で、特に健康志向のARCは歴史があるだけに高齢者も多く贅沢な交流は出来ない。「無理せず、出来ることを精一杯」、誠心あるのみである。11月8日、関西空港でARCの会長以下8名が横断幕を持って待ち受ける中、団長以下12名が到着した。
(以下次号)